小中野中

課題解決に向け、主体的に授業に取り組む生徒の育成

～身に付けた知識・技能を生かし、協働的に活動する学習を通して～（３年計画の３年次）

校長　　佐々木　宏恵

１　研究主題について

本校生徒の実態として、ここ数年「学習意欲・学力の差の拡大」が課題として挙げられたため、言語活動を意識した学び合い、ユニバーサルデザインを意識した板書、家庭学習ノート（こなノート）等の取組を行ってきた。昨年度は、一人一台端末活用研修を生かし、授業でも各教科において場面に応じて端末を使用することで、生徒が主体的に授業に取り組む場面が増え、身に付けた知識を活かして意見を出し合い、協力して調べる、教えあうなど、協働的に活動する場面も見られた。また、自己評価シートや撮影した動画の振り返りなど生徒自身で授業目標に対しての振り返りをすることで、各々の学習に対する意識の高まりも感じた。一方で、受身的で学習に集中できていない生徒や、家庭学習との両立を図れず学習に対して苦手意識をもっている生徒も見られる。放課後等を活用し、学年や教科においてサポートしてきたが「主体的に」という点においてまだ不十分である。以上のことから生徒全員が主体的に学習に取り組めるような授業を目指し、研究や研修を重ね、学年、学校全体で対策をたてる必要がある。

今年度は、課題解決に向けて生徒自身に見通しや目標をもたせることに加え、その活動に対する振り返りをワークシートや端末を活用し、自分自身が学習過程を振り返られるようにすることとした。自らの学びを振り返ることで、身に付けた知識・技能を整理する場を設け、さらには次時への学習目標へとつなげていきたい。学びの継続を意識した家庭学習の在り方を再確認し、朝自習や各教科のコンテストの実施等を行うことで、さらなる学習内容の定着を図りたい。また、生徒が「必要感や切実感をもって」課題解決に向かえるよう、導入から課題設定までの教師の働きかけを工夫し、生徒が主体的に学べる環境を整え、生徒一人一人が生き生きと活動できる授業を確立していきたい。

２　研究のねらい

課題解決に向けて、生徒に必要感や切実感をもたせる導入を工夫し、見通しをもたせたり、身に付けた知識・技能を想起させたりするなど、主体的に課題に取り組ませる。また振り返りの場面を設定し、自分自身で学習内容を再確認させることで、生徒のさらなる学習意欲の向上に努める。

３　研究仮説

(1) 各教科及び学級活動、総合的な学習の時間において、課題解決のために生徒に目標や見通しをもたせ、自分の言葉でまとめたり、振り返りの場面を設定することで、達成感や成就感を味わい、学習意欲の向上が図られるであろう。

(2) ユニバーサルデザインを意識した板書、ワークシート、端末の利用を工夫し、学びの過程を生徒自身が理解することにより、学習内容の定着及び学力の向上が図れるであろう。

４　研究内容

(1) 「わかった・できた・身に付いた」を実感できる授業の工夫（授業力の向上）

ア　主体的に学習課題に向かわせるための工夫

①課題に対して目標をもたせる　興味や関心・見通し・自分と結び付ける。

②自分の言葉で振り返らせる。

(2) ユニバーサルデザインを意識したワークシート・板書・端末活用

ア　ワークシート　思考の仕方・スキルの定着化・家庭学習との連携

イ　板書・端末　　授業のポイントの視覚化

(3) 学校図書館を活用した授業の設定

(4) お互いの指導技術を学ぶ機会の設定

(5) 諸検査の結果を生かす授業の工夫

５　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究

月	日	授業研究　全体会等
4	8	第１回校内研究　全体会 研究についての共通理解
5	1	授業参観研修（チーム別　～2 月）
8	18	第２回校内研究 ｈｙｐｅｒ―ＱＵの結果分析、授業の振り返り（グループ別）
9	1	ローテーション道徳（～12 月）
9	27	教育指導課・総合教育センター学校訪問　第３回校内研究（授業研究）保健体育　授業者　教諭　日向　祐弥
1	6	第６回校内研究全体会(伝達講習会・研究実践、成果と課題、次年度の話し合い、Q-U 分析等)

(2) 一般研修

4	25	生徒に関する情報交換（生徒指導・健康面など）
7	14	心のケア研修　講師　八戸学院大学短期大学部　幼児保育学科教授　野口和也　先生
8	18	道徳授業研究
11	24	第４回校内研究 小６による授業参観及び中学校の授業体験
12	14	第５回校内研究（授業研究）道徳　授業者　講師　中嶋　翔大

６　研究の成果

(1) 各教科において、教師側が課題の提示方法を工夫し授業を行うことで、生徒が見通しをもって主体的に授業に取り組む場面が増えた。

(2) 授業の振り返りを端末等を活用し継続的に取り組ませた結果、生徒自身が学びの過程や成長を確認することができ、次時の学習意欲へつなげることができた。

７　研究の課題

(1) 話合い活動が一部の生徒のみになる場合も多く、全体で意見を交換し合い学びを深めることができなかった。教科の特性にかかわらず生徒全員が参加できる体制を整える必要がある。

(2) 個人差があり、身に付けた知識・技能を生かし主体的に授業に臨む生徒と答えを待つ受動的な生徒がいる。個々が課題意識をもち授業に臨めるよう、さらなる授業改善が求められる。

（記入者　土川　真紀子）